

〔大隈祭〕における講演活動〕

大隈重信は何を語ったか

——『大隈重信演説談話集』を読む——

大日方 純 夫

はじめに——『大隈重信演説談話集』について

ただ今ご紹介にあずかりました大日方です。これが、今お話にありました最新刊の『大隈重信演説談話集』で、二か月前に出たばかりの岩波文庫です。

これまで大隈重信、以下、大隈さんと呼ぶことにしますが、大隈さんの考えや思いを手近に知ることができる本はありませんでした。福沢諭吉については、自伝を含めて、文庫本がいろいろあります。同志社をつくった新島襄も、ちゃんと自伝とか書簡集とかが文庫本になっています。ところが、早稲田をつくり、しかも政治家として活躍した大隈さんについては、読むべき本がなかったのです。手ごろな本がないということ、知りたくてもなかなか知ることができませんでした。

これからお話しするように、もともと大隈さんは演説の名手として知られており、活動していた当時は、いろいろ本が出ていました。ところが、今はほとんど手に入らないのです。このようなこともあって、一昨年の一二月、幸い岩波書店の方から「文庫本にしないか」というお話があり、早稲田大学としても、「ぜひ実現したい」ということで、理事会の決定を経、さらに早稲田大学校友会の非常に強い協力をいただいて、「三年間にわたって、全学の卒業生にプレゼントしよう」と決定していただき、この三月、まずは最初のプレゼントが行われた次第です。

私がここに持つておりますのは市販本で、表紙は栃木県宇都宮の会場で「東西文明の調和」を演説中の大隈さんです。しかし、卒業生にプレゼントしたものには、違う表紙カバーが掛けてあります。創立三〇周年の際、早稲田大学の「教旨」を宣言したときの大隈さんが表紙になっています。

さて、お手元のレジュメの最後のところに、大隈さんの生涯と年ごとの演説・談話・論説の数を記したものをつけておきました（後掲）。大隈さんの演説・談話として、あるいは論説として現在確認されているのがその数です。合計すると二二〇〇になります。新聞などに掲載されたものは入っていませんので、実はもっと膨大な数になります。本とか雑誌に掲載されたものをリストアップした数です。ご覧いただくと、一番数が多いのは日露戦後です。一九〇七年に憲政本党の総理を辞任し、早稲田の総長に就任したあたりから、どつと増えてくるわけです。そして、その後、大体、大正初めくらいまでのところに、大量の演説・談話が集中していることがわかります。

そこで今日は、若いときではなく、六〇歳前後から八〇歳代にかけての時期、大隈さんが何を語ったかをお話ししながら、当時の時代の様子を探り、私たちがどんなことをそこから学びとることができるかをお話ししてみたいと思います。

この本には、大隈さんの演説・談話四一点が収められています。二二〇〇分の四一ですから、ほんのわずかという

ことで、入っていないものが山ほどあります。文庫本では、採用した四一点をテーマ別に分け、大きく二つに区切って収録しています。

今日は、この本を使って、時代の流れを追いながら、大隈さんがどんなことをしゃべったのか、どんなことを主張したのかを、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

I 日清戦争後の演説・談話

(1) 政党政治家として

まず、最初の時期、日清戦争後の時期です。まだまだ演説の数は少ないですが、ここでは三つを取り上げておきたいと思います。数は少ないですが、非常に重要な、その後につながるテーマが話されています。

大隈さんが政治家であることは明らかです。まず、政府を去った後、立憲改進黨の党首として活動し、その後、二度にわたって首相を務めました。最初の首相の時期は、政党政治家ということと登場したと言ってよいかと思っています。二番目は、後ほどふれますように、もちろん政党がバックにあります。むしろ、政党政治家というよりは、民衆政治家として登場してきたということができます。その点で、先ほどお話しした一九〇七年、明治四〇年あたりからの大隈さんの活動がバックにあり、その中で獲得した人気というか、民衆の支持というかが、国民的な大隈ファンを生み出し、そうしたなかで登場してきたと見ることができます。

さて、他方で大隈さんは外務大臣として、外交政策の担い手でもありました。四回にわたって外務大臣を務めています。うち二回は外務大臣単独ですが、後の二回は首相だった時期の兼任です。この四回のうちの二番目の時期の演

説である「外交の方針」を、この本に収めています。一八九七年に衆議院で演説した外務大臣としての演説ですが、その中で重要なポイントとして、日本の外交はグローバルな視点に立つて政策立案をしなければいけないと述べています。一貫した外交方針が不可欠だとも主張しています。さらに、外交路線は国際的なルールに沿い、正義に基づかなければいけないとも述べています。つまり、グローバルな視点と、国際的な信頼と協調の重要性を強く意識して、外交政策を展開しようとしていたと考えることができます。

(2) 東京専門学校の創立者として

それから、同じ一八九七年、外務大臣の時期に東京専門学校で演説をしています。東京専門学校、つまり現在の早稲田大学ですが、いうまでもなく大隈さんはその創立者です。しかし、結構、勘違いしている人がいます。大隈さんは「校長だった」とか、「元々総長だった」というふうに勘違いしている人がいるのです。しかし、大隈さんが総長になったのはずっと後の話です。大隈さんは、実は東京専門学校の創立から一五年間、公式行事に出てきていない。これが早稲田の大きな特徴です。

東京専門学校は、政府を追われ、立憲改進黨をつくった人たちが創立した学校です。ですから、妨害活動がいろいろあったわけです。その点では、慶應や同志社とは違います。「政治家がつくった学校だから、何かたくらんでいるだろう」と政府側はにらむわけです。「謀反人を作ろうとしているのではないか」とか、「改進黨の子飼いのメンバーをつくらうとしているんじゃないか」とかにらまれて、苦難を重ねてきました。こうした事情から、「学問の独立」をはっきり宣言しなければならなかったという要素もあるかと思っています。

大隈さんは、一五年目になって初めて正式の儀式に出ました。これは卒業式と併せて開催された創立一五周年の記

念式典ですが、ここで演説した中にでてくるのが、失敗を恐れるな、落胆するなという、卒業生に対するメッセージです。「複雑なる社会」で「勇戦奮闘する初陣」だ。社会には「種々の敵が沢山」いる。だから、「必ず失敗する。随分失敗する」、しかし、失敗に落胆するな。たびたび失敗すると、それによって大切な経験を得る。このように、まず、失敗を恐れるなというメッセージを送った後で、創立についての理念を語っています。

(3) 女子教育の支援者として

さて、三番目は、朝ドラの世界です。先般、NHKで放映された朝の連続テレビドラマ「あさが来た」では、高橋英樹が大隈さんを、松坂慶子が綾子夫人を演じました。そのドラマにかかわる事実関係を確認しておきます。

これも同じ年、外務大臣を務めている一八九七年のことです。このとき、大隈さんは日本女子大学の設立運動を進めていた成瀬仁蔵と出会い、援助を約束しました。そして、発起人会に参加し、その創立披露会で成瀬につづいて賛成演説をしました。それが「男女複本位論」で、非常に面白い演説です。ちょっと紹介しておきましょう。日本はこれまで単本位だった。国民というのは男だけだった。女子はただ服従の義務という本位を守らせられてきた。服従主義という単本位主義だった。しかし、それではいけない。これを変えてく必要があるということです。

ちょうどこのとき、貨幣制度の面で金本位制が確立されました。そういう時代状況をバックにおきながら、金銀複本位の、男女が複合した社会を作ろうと、比喻をこめてアピールしたのです。今風に言うと、「男女共同参画社会が必要だ」という主張になるでしょう。女性もちゃんと教育を受け、社会のことを担うことができる主体にならなければならぬということです。そこには、時代を超えた大隈さんの発想があったと思います。

さらに、その後、大隈さんは設立委員長になり、日本女子大学に対する支援を継続し、ことあるごとに演説したり、

メッセージを送ったりして、バックアップして이었습니다。

以上、日清戦争後の時期の大隈さんの演説から、政治家としての外交政策、早稲田大学の創立者としてのメッセージ、女子教育の支援者としての発言の三つを紹介しました。

Ⅱ 日露戦争後～第一次世界大戦期の演説・談話

(1) ≪民衆政治家≫として

①憲政本党の総理辞任―政治活動の第一線から退く

さて、今日の話の中心は、日露戦争の後から第一次世界大戦の時期にかけてです。ちょうど一〇〇年前の時期に当たります。大隈さんは、七〇歳から八〇歳近い時期に、盛んに演説・談話をしています。「七〇、八〇で引退か」というと、「いや、そうではない」というのが大隈さんのスタンスです。「一二五歳まで生きる」ということで、「私はずつと若者だ」と主張し続けています。しかし、その大隈さんが、ある事情から政党政首をリタイアすることになってしまいました。

その時の演説が、この本の中に収めてある「〔憲政本党〕総理退任の辞」で、一九〇七年一月二〇日の演説です。この演説は、非常に含蓄に富んだ複雑な演説です。喜んで退任したと勘違いされがちですが、実際には、憲政本党の内部に軍拡容認・積極主義へと路線変更をはかる改革派がおこってきて、大隈さんがその地位を追われたというのが真相です。

ですから、「退任の辞」であるにもかかわらず、自分は、生涯、政治に関与することを決してやめないと言うわけ

です。政治家を辞めたわけではないのです。しかし、総理、党首は退くと述べるを得ませんでした。

その演説の中で、日露戦後について、これから国民が非常な困難に陥る時が必ずくると予言しています。つまり、戦争は終わったけれども、増税が続いて、それが国民生活の困難を招くというのです。この後もまた触れますが、戦争や軍備拡張と増税の関係を繰り返し指摘していることが、大隈演説の一つのポイントです。

この演説のもう一つのポイントは、自由党のことを引き合いに出して、一九〇〇年は憲政史・政党史にとって大きな転換だと述べている点です。自由民権運動は、自由党と立憲改進黨という二つの政党が中心になって推進したわけですが、自由党は、一九〇〇年に立憲政友会になってしまいました。体制化したという言い方がいいかどうか分かりませんが、これが大きな節目になったということで、自由党消滅のことに言及しながら、われわれは依然政党として抵抗すると述べています。

三点目は、これもこの後、引き続き主張していく点ですが、立憲的国民をつくるのが大事だと述べていることです。つまり、国民の政治思想が乏しければ、政治はちゃんとならないというのです。ですから、国民に対する教育の必要性を提起します。

そして、演説の最後に、自分にとって政治は生命であり、一生、政治活動を続けると宣言します。しかし、この総理退任により、公式に早稲田大学の総長になることになります。

こうして大隈さんは政党の党首は退きましたが、その後もことあるごとに、政治に関する発言やメッセージを発しています。この本の中には、政治に関する発言を四つほど入れてあります。

一つは、一九一二年、ちょうど明治末年ですが、「選挙人に与う」と題するもので、演説ではなく論説です。総選挙を前にして発表したものです。この中で、これまでの選挙を振り返りながら、買収とか利益誘導とか警察の干渉と

かがあると、選挙の意義がなくなってしまうと述べ、国民に対する「立憲的訓練」が必要だと主張しています。

そして、棄権は国政参加の「鍵」を放棄することだとして、選挙の意味を強調します。その点では、現在の私たちもまた、同じ問題を抱えていています。選挙、そして政治ということでは、国民の政治参加の重要なチャンスです。で、選挙と国民の関係に関する大隈さんの主張を、あらためて思い起こしてみることが必要ではないかと考える次第です。

さて、その翌年、一九一三年二月に発表したのが、「勢力の中心を議会に移すべし」という論説です。これは、一九一二年、ちょうど「明治」から「大正」に変わった時期ですが、この時期に起こった憲政擁護運動に関連するものです。特定の薩長藩閥政治家が政治を牛耳ったり、官僚が政治を動かすのではなく、議会や政党を中心とする政治を実現すべきだという運動が起っていました。

その中で大隈さんも、この護憲運動の展開に期待を寄せながら、「閥族」は「瓦解」するということを、必然的な見通しとして述べています。しかし、政党の力も薄弱だとして、「国民の代表機関たる議会」にもとづく内閣を作ることが必要だと主張します。つまり、政党内閣を主張し続けており、その意味では、先ほど触れた民衆政治家大隈さんからのメッセージとして読むことができますと考えられます。

②内閣を組織——政治の最前線にたつ

さて、こうして政治の第一線からは退いていましたが、また再び政治の最前線に登場することになります。第二次大隈内閣の成立です。ちょうど一〇〇年前の時期に当たります。一九一四年四月から一六年一〇月まで、首相をつとめることになったのです。

それはなぜかといいますと、先ほど触れましたように、まず、護憲運動で桂内閣が倒れます。その後、山本内閣が

成立しますが、この内閣もシーメンス事件でまた倒れます。民衆の声が高まって、内閣は二回にわたって退陣を余儀なくされたのです。

その後にまた藩閥政治家を出したら、また倒されて危ないと元老たちは考えました。では、どうするかということで、大隈さんが「登用」されることになったわけです。民衆の支持、あるいは強力な民衆的パワーを持った大隈さんが登場するチャンスが生まれてきた。いわば民衆政治家として政府を組織したと言つてよいのではないかと考えます。

こうして一九一四年四月に首相に就任したわけですが、その大隈さんが、六月、早稲田大学の教授講師慰労会で、総長として演説します。

まず、「七十七歳の老人」をこのような境遇に当たらせるとは、なんとも青年・壮年に意気地がないと、一言苦情を述べてはいますが、しかし、やる気満々の心境ではないかと思えます。面白いのは、この演説の主題が「政治趣味の涵養」、つまり「政治趣味」を養うということにある点です。

政治を芝居にたとえて、政治にも「見物人の目」が大事だと述べています。批評家がちゃんとしないと、芝居はよくならない。つまり、面白い芝居ではなく、良い芝居にするためには、ちゃんとした劇評がなければならない。評論家がきちんとコメントしてくれば、芝居や劇も良くなる。政治も同じだということです。

ですから、国民が政治を自分のものとして論議し、批評するような社会をつくらなければ、政治は良くならない。政治は「国民の反響」であり、国民が幼稚なら政治家も墮落するということです。その意味で、「真の国民」をつくるためには、国民に対する政治教育が必要だということになります。この点で、大隈さんが展開する二つの活動、政治と教育とは連携していると言えます。

これと関わって指摘したいのは、この時期、大隈さんが様々な本を出版しているということです。国民の教養を養

うための本を出そうとして、出版活動を非常に意欲的に展開しています。

一九一五年三月に行った演説が、「憲政に於ける輿論の勢力」です。これは、大隈記念館の中で肉声が聞けますので、ぜひお聞きください。ただし、実際に生の声でしゃべったものと、この本に入っているものとは、若干違いがあります。本の方は肉声から起こしたのではなく、当時活字化されたものを採用していますので、ずれがあります。もちろん趣旨は同じです。

ポイントは、帝国議会開設から二五年にもなるのに、まだ選挙が不完全だと述べている点です。ここでも、世論を政治家がちゃんと導くことが必要だとして、議會を左右する「鍵」を握るのは国民であり、国民の「覚醒」を促すことが必要だと主張しています。選挙の意味、憲政の意味を強調しているのです。

さて、この時期、大隈さんは七七歳とかなり高齢ですが、まだまだ現役ということ、大隈さんを首相の座につけた元老たちの思惑を裏切って、大隈内閣は予想外の長期政権になります。

こうして大隈さんは、日清戦後から日露戦後にかけて政治活動を展開しながら、国民に対するメッセージを発し続けたのです。

【補注】一九一四年二月、大隈内閣のもとで衆議院が解散され、翌一五年三月、総選挙が実施された。演説「憲政に於ける輿論の勢力」は、この選挙に先立つ三月二日、レコードに吹き込んで各地に送られたもので、大々的な選挙戦の結果、大隈与党は大勝利した。しかし、選挙後、内務大臣大浦兼武による選挙干渉が問題となり、大浦は辞表を提出。大隈以下の閣僚も辞表を提出したが、元老からの留任勧告により内閣を改造して留任した。結果として、「選挙人に与う」（前掲）で主張したことに背反する事態を当の大隈内閣が招来してしまったといえる（『大隈重信演説談話集』「解題」）。

(2) 早稲田大学総長として

つぎに、総長として語ったことにうつります。大隈さんは、つねづね自分はもともと教育が好きだった、教育は「生来の嗜好」だと語っています。つまり、幕末の時期、佐賀藩が長崎に開設した致遠館で教鞭を取り、それから東京専門学校をつくった。そして、ついに総長に就任して、以後、亡くなる一九二二年一月まで、総長に在任しています。

一九一三年一〇月一七日、早稲田大学創立三〇年祝典で、大隈さんは総長として早稲田大学の「教旨」を宣言します。そこでは、「建学の本旨」として、「学問の独立」、「学問の活用」、「模範国民の造就」の三つが提出されています。

早稲田大学は、現在、創立一五〇周年に向けてのビジョンを掲げ、その実現のために活動を展開しています。二〇三二年ということで、だいぶ先の話ですが、その基本的な柱が、この大隈演説にあるのです。一〇〇年ほど前の大隈さんの演説、宣言を現代の中で発展させながら、早稲田のさらなる発展を図ろうと取り組んでいるところです。

(3) 「東亜平和」論の提唱者として

さて、こうして政治面、教育面で活動するだけでなく、大隈さんはこの時期、いろいろな活動を展開しています。

一つは、「東亜の平和」ということで、アジアの平和をどうつくるかについて発言しています。一九〇四年一〇月、日露戦争最中の時期に当たりますが、早稲田大学の学生が組織した清韓協会で演説しています。「東亜の平和を論ず」という演説です。これは、「大隈ドクトリン」とも呼ばれる有名な演説です。「アジア・モンロー主義」、つまり、ヨーロッパ列強はアジアに入ってきて勝手なことをするなという主張で、その意味では、列強が中国分割することに反対を唱えた論説・演説です。同時に、「権謀術策」では「国際的道義」が成り立たないとして、「侵略論」に反対しています。これは、先ほど触れた「外交の基本方針」にも関わるところで、ヨーロッパ列強のアジア侵略、あるいは分

割に強く反対する立場を表明しています。

その後、何回か、この問題で論を展開していますが、この本の中にはその三番目のもの、「三たび東方の平和を論ず」も入れています。その中では、中国に対する支援は日本の「天職」だと、経済関係の緊密化を踏まえた日中の友好が不可欠だと強く主張しています。中国は、日本の貿易の最大の顧客で、日本の「一大市場」だから仲良くしようと提案しています。

ただ、中国については、その後、「日支親善策」の中で、元は優秀な「天才国」だったけれども「中毒」で衰えてしまったので、「解毒剤」が必要だということも主張しています。このままいくと大変なことになるとして、日本が誘導し、リーダーシップを取って手助けをしてやるが必要だと主張するようになっていきます。

以上のように、アジアの平和、アジア外交をどう考えるかということが、繰り返し、この時期、主張されています。

【補注】 一九一五年一月、大隈内閣の外相加藤高明は、中華民国大統領の袁世凱に対し、日本の権益拡大を迫った。二十一カ条要求である。中国に対して強硬論を展開していた新聞は、二十一カ条要求当時も、中国保全を繰り返し唱えていた。中国が西洋帝国主義に対して保全されることは、日本の独立にとって不可欠の条件である。したがって、世界戦争によって西洋帝国主義が中国から一時後退した機会に、日本がこれに代わって中国に帝国主義的な支配を確立することは、中国保全の建前に反しないと強弁され、日本の行動をアジア・モンロー主義的論理で正当化することが試みられたという。したがって、中国に対する二十一カ条要求は、演説「東亜の平和を論ず」で示した大隈ドクトリンの延長線上に位置づけられるとも言える。

なお、アジア・モンロー主義的な発想は、第一次世界大戦の勃発により、日本の政治家・外交官・陸軍軍人などに広く共有されていたとされる（『大隈重信演説談話集』「解題」）。

(4) 文明運動の推進者として

四番目は、「文明運動の推進者」として、です。一九〇七年一月に「東西文明の調和」ということを初めて提唱します。

この年一二月、『開国五十年史』の上巻が出版されています。大隈さんの編纂、つまりリーダーシップで出された本です。翌年二月には下巻が出ます。ちょうど「東西文明の調和」を提唱した時期に、『開国五十年史』の編纂が進んでおり、この編纂過程で得た捉え方、認識がこのような文明論のバックにある、と見るができます。

この論説の中で、アジアの西部に発生した文明、つまりメソポタミアとかの文明が、東に向かってきた。東洋文明がこれから生まれ、インド・中国・韓国を経て日本に到達したと言っています。他方、西に向かった文明、中東地域から西に向かった文明が西洋文明の源になったというわけです。そして、日本の開国によって、東西両文明が結び合わされたと述べています。その結果、日本は大変な混乱に陥った。けれども、五〇年たって調和してきた。世界のすべての文明の要素が日本に集まってきたと述べるわけです。

早稲田大学校歌の二番が、まさに、これに当たります。「東西古今の文化のうしほ 一つに渦巻く大島国の」ということで、大隈さんの主張に結びついています。

こうして西に向かった文明と東に移ってきた文明が融合し、出会った。その真の文明を、日本が世界に発信しようということで、「東西文明の調和」が主張されます。

その後、大隈さんはこの演説を具体化するための活動を展開していきます。大日本文明協会という組織を作って、演説したり、出版活動をフルに展開したりしていくことになります。一九〇八年に早稲田大学関係者を中心として大日本文明協会という組織が作られ、その会長に大隈さんが就任します。この会は、「国民知識の向上進歩に資し、以

て東西文明の調和融合を計」ることを目的に掲げています。「開国進取の国是」にもとづいて万国対峙の文明競争が始まり、日本は大いにこれを展開したとして、大隈さんも講演活動を各地で展開していきます。

さらに、『大日本文明協会叢書』というシリーズを出版して、当時、西洋で出たばかりの新しい様々な書物を翻訳紹介するわけです。つまり、日本の人々が読んで知識を啓発するための素材を提供することを、大々的に展開していきます。大隈さんが存命中だけでも一九五巻が翻訳・出版されました。昭和初期までに、名前はいろいろ変えていきますが、三〇〇冊を超える本が出版されました。一大文化事業です。このようにして、大学だけでなく、広く社会に対して文化・啓蒙活動を展開し、そのための素材を出版する取り組みが展開されました。

(5) 世界平和の提唱者として

大日本文明協会の会長としての活動とあわせて、つぎに五番目ですが、七〇歳を越えた大隈さんは、一九一〇年に大日本平和協会の会長に就任します。第二代の会長です。この大日本平和協会は、国際的な平和協会組織の日本支部という位置づけになるわけですが、大隈さんはその会長になって、まず、就任演説を行いました。これが「平和事業の将来」という演説です。

この中で、日露戦後、国際的な軍備拡張競争によって財政負担が迫ってきたとして、先ほど触れたような趣旨を、ここでも繰り返しています。そして、平和を破るのは「文明程度の低い国」だとして、だからこそ文明の普及活動が必要だと主張します。先に取り上げた「東西文明の調和」の発想を、この平和論の流れのなかとらえ返してみても必要だと思います。

また、この演説の中で、皮膚の色で人間を差別することはよろしくないと批判しています。今日に通ずる人間に対

する見方というか、国際平和に関する考え方が芽生えてきていると見ることができます。

翌年の論説「余が平和主義の立脚点」の中では、人を殺すことは罪悪だとして、一日も早く人を殺す戦争は廃止すべきだと主張しています。特に、「武装的平和」は、軍備拡張によつて租税負担と生活難を国民に強いるものだとして、軍隊を解散して生産事業に振り向けるべきだと主張しています。そして、国際紛争は軍勢力ではなく、「仲裁裁判」、話し合いと協調によつて解決すべきだとも主張しています。

さらにその翌年には、「世界平和の趨勢」と題して、世界平和論があちこちで出てきて、「平和の曙光」が見えてきたと述べています。軍備拡張によつて財政負担は限界に達し、国民生活は限界にまで低下しているとして、戦争は緊密化した経済関係を破壊し、大損害を与えるから、容易には行えないだろうということです。

そして、「殺人器の進歩」、つまり、武器の進歩はいつそう悲惨な状況を出現させるから、これを避けようと考えようになると述べています。その点で、大隈さんの時期には全く想定されていなかったことですが、原爆とか核兵器とかいうものを思い浮かべれば、この予言に合致すると見ることもできます。そして、軍備競争は「馬鹿馬鹿しきこと」として、「大陸軍」の削減、つまり軍縮を主張しています。

さて、こうして平和を主張しているわけですが、皮肉なことに、第一次世界大戦に参戦したのは、実は大隈内閣の時期です。現実には戦争に参戦した。しかし、平和を主張している。これは、ある研究者に言わせると、皮肉かどうか分かりませんが、大隈さんのスケールの大きさを示すものだということになります。言っていることと行っていることが、確かに矛盾しています。しかし、私は現実主義と理想主義を両睨みでとらえていると見た方がよいのではないかと考えています。現実の中で縛られつつも、他方で現実を超えようとしており、そこに大きな意味があると考えられるわけです。

理想を掲げる。しかし、現実の選択として、首相として参戦を選んだ。こういうことになります。これは、なかなか難しい議論ですが、参戦したにもかかわらず、平和を主張している意味自体は重要だと思つて、紹介する次第です。大隈内閣の時期にも、平和協会の会長を務めていますので、「文明史上の一新紀元」とか、「大戦乱後の国際平和」とかいった論を発表しています。この中で、戦争の弊害が明らかであるにもかかわらず、世界大戦が起こったのは、「民族的国家」の「膨張的運動」、「帝国主義」による植民地獲得競争が原因だとしています。世界大戦の「生ける教訓」は「帝国主義の誤謬」にあるということです。その意味で、侵略や他民族抑圧を克服することを、戦争の教訓として引き出すべきだと大隈さんは捉えていたと見ることができます。

戦後を見据える形で、一九一五年、当時、サンフランシスコで開催された万国平和会に、日本の平和協会の会長としてお祝いのメッセージを送っています。「大戦乱後の国際平和」という文章です。この中でも、「国際平和」の実現には「民族的偏見の除去」が必要だと主張しています。それぞれがそれぞれの民族の利害だけを主張するなら、対立は克服できないということです。今日にも通じる視点だと思えます。

ただ、私たちはその後のことを知っています。そうした立場からすると、いかんせん、大隈さんがこう主張したその後の時期に、またまた大戦争、第二次世界大戦が起こってしまったという事実にぶつかります。あらためて歴史の悲劇性を思わざるを得ないのですが、しかし、それにもかかわらず、大隈さんの演説やメッセージには、私たちがやはり学ばべきものがあると考える次第です。

【補注】大隈は演説「平和事業の将来」で万国平和協会に言及しているが、この会は、一八九九年、ロシア皇帝ニコライ二世の提唱によって開催されたハーグ平和会議を機として結成されたものであり、大隈がこの演説で「平和の主唱者は平和の攪乱者である」と語っていたのは示唆的である。「平和協会の会長は、平和の攪乱者になるかも知れない」という大隈の言葉通り

（皮肉にも）、第二次大隈内閣のもとで日本は第一次世界大戦に参戦した（『大隈重信演説談話集』『解題』）。なお、一般的に言って、「平和」という言葉自体は、必ずしも戦争政策と矛盾するわけではなく、むしろ戦争推進のために「平和」が語られる事態もあることに注意する必要がある。

（6）青年への期待

さて、こうして大隈さんは日露戦争後の時期、様々な活動を展開しました。この時期、すでに七〇歳を超えているわけですが、青年への期待を繰り返し語っています。菊池曉汀という人が編纂した『青年訓話』という本がありますが、その中で、この編者は、大隈さんの青年への思いを、つぎのように紹介しています。

大隈伯はいかなる青年とも快く会って論議し、一たび青年問題に関して口を開けば、談論風発、その所論は実に確であり、天下の青年はこぞって耳目をそばだて、これを傾聴する、と書いています。そして、各雑誌の記者が取材した大隈さんの青年へのメッセージを掲載しています。

大隈さんはいろいろ興味深いことを述べています。まず、青年には元気が必要だと主張しています。元気は人間の生命であり、ことに青年の生命だということです。また、目的を持って、立身出世のためには、一步一步努力をいくことが大事だと、青年に対して未来を展望するための示唆を与えています。

では、自分はどうかということ、やはり「希望」が大事だと述べています。「青年の元気で奮闘する我輩の一日」では、大隈さんに元気を与えるのは青年だと語っています。希望を持って、希望さえあれば「老朽者」になるおそれはないのです。

「失敗すればいよいよ奮闘努力を続行する」として、一度や二度の失敗で悲観するな、我輩の生活はいつも希望が

輝いていると述べます。非常に楽天的で、未来に希望を見る生き方が、大隈さんの生き方なのです。

さらに、「青年の天下」というメッセージの中では、「この世界は諸君達の世界である」、「我輩もまた日本の青年である」として、年をいくら取ったって、青年の意気にかわりはない、「我輩は諸君の友達だ」と述べています。七〇代の大隈さんが、若者に対して「友達だ」と言っているわけです。失敗を恐れるな。「七たび転んでも八たび目に起きればよい」ということで、青年に励ましを送ります。

では、どうすれば衰えないのかというと、「何事も楽観的に見て行けばよい」ということで、「快樂的に觀察」すれば、何事にも興味が湧いてきて、愉快にいろいろな活動ができるというわけです。

こうして、大隈さんは、人々に一二五歳まで生きるのだというメッセージを送ります。現在の高齢化社会を予見するような、生涯現役という主張が大隈さんのメッセージだと受け止めることができます。ですから、若者だけでなく、むしろ高齢者に対しても、重要な生き方の指針を与えていると見ることができます。

さらに、「大隈は耳学問だ」と言われるが、それは違くと、異議申し立てをしています。「我輩の知識吸収法」の中では、暇さえあれば書物を読むと述べています。「暇さえあれば、その間、酒でも飲んで騒ぐというようなことはしない。それよりか読書をする」と言っています。酒を飲む暇があったら本を読め、というのです。

ちよつと耳の痛い方がいるかもしれませんが、大隈さんは、「いやしくも社会の表面に立ちて活動せんと欲するものは、政治家であれ、実業家であれ、教育家であれ、絶えず時代の趨勢に着目して、その消長変遷に應ずるだけの新知識を収容するに努めねばならぬ」として、読書の必要性を強調しています。

大隈さん自身についても、耳学問だけではなく、ちゃんと勉強しているということが重要なところかと思います。いろいろな勉強を踏まえるからこそ、実際にいろいろな発言ができるわけです。その点で、この文庫本を作るのは、

結構大変でした。該博な知識を駆使した大隈さんの演説を解釈、解読するためには、単に演説を読んだだけでは分からないだろうと考えて、注をかなり懇切に付けました。

しかし、勉強ばかりしていても、だめだとも言っています。「運動」が大切だと言うのです。「我輩は運動が大好きだ」と述べています。運動とは言っても、大隈さんの場合、散歩が中心ですが、運動は人間にとって「必要欠くべからざるもの」だとしています。

(7) 女性へのメッセージ

さて、もう一つ重要なこの文庫本の特徴は、若者とあわせて女性にメッセージを送っていることです。先ほど、女子高等教育ということでお話をしましたが、その後も、大隈さんはこれについてたびたび発言しています。

例えば、一九〇五年五月の談話ですが、女性に対する教育を大いに促進すべきだ、女性の地位向上が必要だと発言し、日本女子大学の教育をめぐるエピソードを紹介しています。アメリカから来た人が、女性に教育を与えたら、生意気になって、まずいんじゃないかというようなことをいろいろ言っているのですが、大隈さんは、いやいや、そんなことはないということで、日本女子大学の教育のことを紹介しています。

さらに、日露戦後ですが、女性こそが国民の基礎だ、社会参加のためには、実業思想の普及が必要だとして、女性が働くための基礎となるような教育・教養が必要だと述べています。

そして、夫婦共稼ぎ、共働きですが、これは文明の進歩にともなって必然化すると述べ、女性の労働への参画と、学問修得の意義を強調しています。これまた、今を予想した先駆的な発言として読むことができますので、あらためて強調しておきたいと思います。

さらに、少し後の一九一八年の論説になりますが、その中では、人類にとつての男女関係の重要性を強調し、夫婦関係こそが基本であり、愛こそがすべての本だと言っています。そして、男・女の縦糸・横糸が織りなす社会のあり方について、宗教や歴史のいろいろな知識を出しながら説明しています。西洋における文明の進歩、あるいは富強の背景にあるのは、女性の社会参加だということです。「進化の法則」に沿ってすすむべき社会として、女性の社会参加を展望していたということができます。先ほどの繰り返しになりますが、男女共同参画社会を先取りするような発言として、一〇〇年後の今日にも生きていると考えるわけです。

同時に、一九一七年の「婦人問題解決の急務」の中では、「婦人問題」が大問題になるので、きちんとした研究が必要だと主張しています。つまり、両性関係に関する研究が非常に弱いとして、歴史的な視点から男女関係史や婚姻史、結婚の歴史を研究すべきだと述べています。これは、今風に言うところ、ジェンダー的な視点が必要だということになります。男女関係の中で歴史を見ようというところで、非常に先見的な主張ともなります。面白いのは、夫唱婦随はアジアにおける男性優位の思想のルーツだと述べたり、西洋でも古代は女性が男性の権力の下で抑圧されてきたと述べたり、「婦人問題」が解決しないのは立法者が男性だからだと言っている点です。法律を作るのが男だから問題が解決しない。これは、女性の政治参加が必要だという主張につながっていきます。

ところで、この文庫本を三月に出しましたところ、同僚の村田晶子先生から、「三月に早稲田大学のジェンダー研究所から、『早稲田大学のジェンダー研究／教育の深化のために 早稲田からの発信』という本を出し、その序文で大隈の女子教育談を取り上げました」というメールをいただきました。「ただ、残念ながらこの文庫本が出たことを知らなかった。だから、これからこの本で学び続けたい」ということでした。

これについては、早稲田大学としてもちよつと耳の痛いところがあつて、「今、一生懸命、女性教職員を増やしたり、

女子学生を増やそうと言っているけれども、大隈さんは昔から考えていたんだということで、その意味で、大いに大隈さんの当時の発言とか、あるいは主張を、学内外にわたって、読みあるいは学ぶことが必要だ」ということで、村田先生は私にメールを下さったわけです。

以上、日清戦後から日露戦後にかけての大隈さんの演説・談話についてお話をしてみました。

Ⅲ 第一次世界大戦後の演説・談話

さて、最後になりますが、大隈さんの最晩年に当たる第一次世界大戦後の演説・談話について、駆け足になります。紹介したいと思います。

一九一九年に第一次世界大戦は終わります。そのときに発表した「永久平和の先決問題」という論説があります。この中で大隈さんは、第一次世界大戦の教訓は、正義・人道こそが「最後の勝利者」だということを示したことにあるとして、民族自決は天賦人権思想の具体化だと述べています。「人類永遠の平和」を実現するためには、これが合理的で有効だということです。

そして、中国の春秋戦国時代を思い起こして、「霸道」ではなく、「王道」を実現することが重要だと述べています。その意味で、先ほどは「東西文明の調和」を大前提として、西洋文明を受け入れた日本の開国から五〇年が経過したということを主張しましたが、しかし、西洋だけではなく、東洋のそのあり方を再評価すべきだと主張していることがわかります。大隈さんが、第一次世界大戦について、文明というものが戦争を起こしたと言っているからです。

一九一九年四月、大隈さんは早稲田大学の始業式で訓示をします。当時、まだ正式な大学、早稲田大学とはなつて

いなくて、専門学校令による大学ですが、その訓示の中で、近々早稲田も正式に大学になると述べています。そうなれば、私立であるけども帝国大学と同じように、国際的な「理智の競争」や「學術の競争」に参入する時代が来ると予言します。そして、第一次世界大戦の終結を踏まえ、「ヨーロッパの文明は誤った」と主張します。文明、文明と言うが、実はその文明が戦争を起こした。そこで、これからはアジアにある「王道」の思想に拠り所をもとめようとしていたのではないかと、私は読み取っています。

さて、事実上、早稲田大学での最後の大隈さんの演説となりますが、亡くなる前年、一九二一年の四月、始業式に際して演説したものがあります。そこでは、専門が分かれると総合性がなくなってしまうとして、人間の基礎、社会の基礎を踏まえるべきことを要請しています。また、国際平和を破って戦争をすることを厳しく批判して、「文明・文化は人殺しをやった」と述べています。

そして、私が一番好きな大隈さんのメッセージですが、つぎのように言います。「我輩は死ぬまで覇氣を失わない。野心がなくなったときは死ぬ。死ぬのだ。そこで、一生自己の力あらん限り勉強を続けていかなければならない。勉強を続けていくと、初めは一向できないものも、大器晩成で進んでいくのである。我輩は何だか段々進むようだ。去年の大隈より今年の大隈の方が物知りになっている。しからば、来年は、また一層物知りになるであろう。全体、学問というのは一生涯の事業である」と述べるわけです。

これが八三歳の時の言葉です。翌年亡くなるわけですが、勉強、勉強ということで、常に新しい情報を仕入れて進歩する。留まることを知らぬ大隈さんの未来志向の意気込みが分かるうかと思えます。

こうして大隈さんは、学生の始業式に際して、勉強の意味を唱え、勉強は「一生涯の事業」だと主張したわけですが、この年の九月に病床につき、翌年一月、八三歳一〇か月で亡くなることとなります。

政治学者の吉野作造の日記を見ますと、面白いことが書いてあります。彼は東京帝国大学の教授で、民本主義という政治論の提唱者ですが、こんなふうに書いています。「形のうえでは大いに異なるが、イギリスならグラッドストーン、ドイツならビスマルクの逝去にあたるかもしれない。巨星落ちて再びこのような人物を求めることはできない」と書いています。「国際的政治家の死去」として、吉野作造は大隈さんの死去を捉えた、と言うことができます。

同様のことは、亡くなったときの新聞でも主張されています。『東京朝日新聞』は、世界的政治家を失ったと述べ、『時事新報』は、政治上だけではなく、教育・文化の方面でも偉大な力を発揮した、ほかの元老は政治だけだったのに、大隈さんは違うと書いています。

一月一七日、告別式が行われます。国民葬は日比谷公園で行われましたが、会葬者は二〇万人から三〇万人ということで、きわめて多くの人々が大隈さんの死去を見送ったのです。こうして大隈さんは世を去りました。しかし、その言葉は、ここに、こうしてよみがえっています。

時代の中で語り、しかし、時代を超えて語ってきた。これを、早稲田大学校歌風に言えば、「現世を忘れぬ久遠の理想」ということになります。「現世を忘れぬ」、つまり、その時代の中で語る。しかし、時代に縛られず、時代を超える発想を持つ。そこに理想の追求があると思うわけです。

大隈さんに習いながら、私自身も、これからさらに学び続けることをお誓いして、つたない話ですが終わらせていただくことにします。

ご清聴、ありがとうございました。

【資料】 大隈重信の生涯と演説・談話・論説

〈演説・談話・論説数〉

1838年（天保9）佐賀城下の会所小路に生まれる。	
1854年（嘉永7／安政元）枝吉神陽（副島種臣の兄）等の義祭同盟に参加。	
1864年（文久4／元治元）藩当局に経済政策を建言し、代品方の役人として長崎に赴任。	
1867年（慶応3）長崎に蕃学稽古所（のちに「致遠館」と改称）設立。	
1868年（慶応4／明治元）明治新政府に出仕。徴士参与職外国事務局判事、外国官副知事。	
1869年（明治2）大蔵大輔となる。以後、財政改革・造幣寮創建・鉄道創設などに尽力。	
1870年（明治3）参議となる。	
1873年（明治6）参議兼大蔵卿となる。	
1878年（明治11）地租改正事務局総裁となり地租改正事業を推進。	
1881年（明治14）国会開設意見書を左大臣に提出。参議を辞任、野に下る。	
1882年（明治15）立憲改進黨結党式で総理に推される。東京専門学校（現早稲田大学）を開校。	
1884年（明治17）立憲改進黨に解党問題がおこり脱党。	
1887年（明治20）伯爵となる。	
1888年（明治21）外務大臣に就任、条約改正交渉に尽力。	
1889年（明治22）外務省門前で爆弾を投げられ負傷、右足を切断。外務大臣を辞任。	
1891年（明治24）立憲改進黨に復党し、代議士総会会長に就任。	
1893年（明治26）	8
1894年（明治27）	7
1895年（明治28）	6
1896年（明治29）	9
4.21 約30年ぶりに佐賀帰省の途につく。5月にかけて県内各地を訪問。	
9.22 外務大臣（第二次松方内閣）に就任。	
1897年（明治30）	11
5月、日本女子大学校創立委員長となる（開校は1901年4月）。	
7.20 東京専門学校第14回得業（卒業）式に出席。	
11.6 外務大臣兼農商務大臣を辞任。	
1898年（明治31）	17
6.30 内閣総理大臣兼外務大臣に任ぜられ、初の政党内閣を組織する。	
11.8 内閣総理大臣兼外務大臣を辞任。	
1899年（明治32）	23
1900年（明治33）	30
12.18 憲政本党総理となる。	
1901年（明治34）	24
1902年（明治35）	28
10.19 東京専門学校創立20周年記念式・早稲田大学開校式に出席。	
1903年（明治36）	22
1904年（明治37）	43
1905年（明治38）	45
8月、国書刊行会総裁に就任。	
9.11 早稲田大学、清国留学生部始業式を挙行。	
1906年（明治39）	63
10.4 日印協会会長に就任。	

1907年（明治40）	108
1.20 憲政本党総理を辞任。	
4.17 早稲田大学初代総長に就任。	
12月、『開国五十年史』の刊行開始。	
1908年（明治41）	143
4.3 大日本文明協会を設立、会長に就任。	
11.22 リーチオールアメリカンスターズと早稲田大学野球部との試合で始球式。	
1909年（明治42）	143
1910年（明治43）	181
1月、大日本平和協会第4回総会で会長に推戴され就任。	
7月、南極探検隊後援会会長に就任、白瀬矗の南極探検事業を支援。	
1911年（明治44）	183
4月、主宰雑誌『新日本』（富山房）創刊。毎号の巻頭論文で論陣を張る。	
1912年（明治45／大正元）	251
1913年（大正2）	211
2.25 大隈邸にて孫文歓迎会開かれる。	
10.17 早稲田大学創立30年祝典において早稲田大学教旨を宣言。	
11.10 佐賀における鍋島閑叟像除幕式で演説。	
1914年（大正3）	201
4.16 内閣総理大臣兼内務大臣となり、第二次内閣を組閣。	
12.25 衆議院を解散する。	
1915年（大正4）	74
1.18 第二次大隈内閣、中華民国に二十一カ条要求を提出。	
3.25 第12回衆議院議員総選挙。与党が勝利。	
1916年（大正5）	39
6.10 インドの詩聖タゴール、大隈邸と早稲田大学を訪問。	
7.14 侯爵となる。	
10.9 内閣総理大臣を辞任。	
1917年（大正6）	61
5.18 佐賀へ帰省の途につく（最後の帰省）。	
1918年（大正7）	93
5月、雑誌『大観』（大観社）を創刊。	
1919年（大正8）	51
1920年（大正9）	67
1921年（大正10）	58
9.21 大隈邸に早稲田大学・ワシントン大学両校野球部員来訪。病をおして懇談する。	
1922年（大正11）	
1.10 死去。	
1.17 日比谷公園で国民葬。多数の一般参列者が訪れる。小石川護国寺に埋葬。	
12月、未完の研究『東西文明之調和』が遺著として刊行される。	

合計2200

*年譜事項は『大隈重信演説談話集』掲載の「大隈重信略年表」、演説・談話・論説数は河野昭昌編「大隈重信論著目録」一～三（『早稲田大学史記要』第6～8巻）にもとづく。